



総合病院での勤務を続けてきて

上原絵里子
沖縄赤十字病院皮膚科部長

皮膚科医としての働き方はたくさんあります。クリニック勤務、病院勤務、大学で研究など。私の場合は、父が皮膚泌尿器科で開業していたこともあり、子どものころから皮膚科外来診療には馴染みがありました。しかし、父には申し訳なかったのですが跡は継がず、大学病院勤務後は総合病院勤務を続けてきました。なぜなら、自分にとっては総合病院で皮膚科医として勤務することがとても面白かったのです。

皮膚科は診療報酬点数が低いために稼ぎが少なく、本来皮膚科があってしかるべきと思われる規模の病院でも皮膚科がないところは、沖縄でもあります。常勤医はおらず非常勤の医師が週に何回かの外来だけを受け持つ病院も少なくありません。幸い私が勤務してきた病院では「皮膚科はなくてはならない」と皮膚科の存在を重要視していただいています。

総合病院なので、内科や外科、整形外科、救急医とも一緒に診療にあたることがよくあります。臓器別に病態検討が行われる中で、外観からのみたてを伝えると「なるほど!」と驚かれ、納得されることもよくあります。皮膚科以外のドクターは皮膚をみるのは得意ではないですからね!

皮膚のみかたはとても大事で、皮疹をみながら触りながら病理組織を頭に描いて、問診の情報や検査結果をもとに診断していく作業は、まるで推理小説を読むかのごとくの面白さがあると思います。皮膚のみかたは他科の追従を許さず、職人芸に

通じるところがあります。皮膚科的な観点を打ち出すことで診断や治療の質があがり他科からも信頼され、他科と共有しながら患者の治療にあたれるところは、総合病院の面白さでもあります。そのためには皮膚のみかたのスキルを向上していかなければならないと思っています。まさに一例一学です。

また、外科的な処置も併せて行うことができます。診療報酬は手術が高いこともあり積極的に手術を行うようにしていますが、壊死性筋膜炎のfinger testなど皮膚科の判断が重要視される場面もあります。このような場合は積極的に関わり、ダイナミックな症例を他科の医師とともに治療していける面白さもあります。

かつて私の指導医は、私が先生からたくさん教えていただいたように、若い先生の教育の重要性をよく話されていました。約束を果たされているかは微妙なところですが、研修医の先生たちには皮膚科的なみたとや皮膚科の魅力をできるだけ伝えるようにしています。他科を専攻しても、皮膚のみかたを知っていることでその先生の臨床力があがり、患者さんにも還元されると思っています。

好奇心をもち、アンテナを光らせ枠を決めず積極的に症例に関わることで、他科からも信頼され、皮膚科医としてのスキルを活かせるのが、総合病院の魅力かなと思っています。